

## 【SeeL通信に見る35年の軌跡】



# 当指導センターの時々が出来事を振り返って

理事長 山岡景一郎



### ■その1 かんえいフェアー

私たちの京都府生活衛生営業指導センターが、昭和56年（1981年）に財団法人・京都府環境衛生営業指導センターとして発足をしたが、このたび新しい法律によって公益財団法人に生まれ変わることになった。

発足以来30数年経たことであるのでこの機会にセンターの歩みを記したいと思う。

京都府の指導センターは現在略称のSeeL（シール）として京都府民に親しまれており、その活動は先進的な指導センターとして全国の各界から注目されていることは大変喜ばしいことである。

昭和56年（1981年）のセンター発足の年に、現在の「SeeLフェア」の前身である「かんえいフェア」を行なおうと、事務局長であった私が提案をした。最初予算1億円を提示したが、却下され、5000万円もダメで、カンカンガクガク激論の末に3000万円を目標に、各店が1枚300円の抽選券を売って調達することにした。10万枚印刷し、60%を売り上げ、何とか予算も確保できたので京都市勧業館（現在のみやこめっせ）を借り切り、全国で初めての「かんえいフェア」を開催した。抽選で当たった顧客500人を瀬戸内海を航行する大型豪華客船に1昼夜招待することができ、勧業館では各業者が競って装飾を施し、百貨店にある名店街を出現させ、珍しい特価品の大量販売もあり大好評であった。

1昼夜借り切った新造船「サンフラワー・セブン」の中では、食べ放題・飲み放題のご馳走の他、料理教室、疑似カジノ、映画館、麻雀大会、カラオケ大会、宝くじ配布等があり、招待客からは大変喜ばれたが、経費調達のこともあり、このような催事の継続はできなかった。

しかし、全国で初めて開催したフェアは「SeeLフェア」として、毎年継続して今年で32回目を迎えることとなった。

### ■その2 25年前の「エイズ講習会」

エイズ（AIDS・後天性免疫不全症候群）の発生がマスコミを賑わし、私たちの生活衛生営業の業界は、死活問題として急遽対策をとることを迫られた。今から25年前の1987年（昭和62年）の春のことであった。

「カミソリでエイズがうつらないか」「銭湯は大丈夫か」「食堂のどんぶりから感染しないか」と連日お客さんからエイズの怖さを、各営業店や指導センターに訴えてくる。

この「エイズ不安症候群」を解消するため、当京都府生活衛生営業指導センター（当時は「環境衛生営業指導センター」）は、早速対策に乗り出した。理容・美容・浴場を中心に各店舗の従事者を集め、3月9日・16日の両日、医師による「エイズ講習会」を開催。簡単なテストを実施し、合格者には「受講証明」を発行して各店舗の店頭でこれを張り出すことにした。京都市役所前の本能寺会館には、京都府下から1000名を超える各業者が出席して熱心に受講した。ところが監督の京都府衛生部からは「このような証明書を指導センターが出すのは権限逸脱だ」とお叱りを受けたが、京都府議会にて「エイズ不安を解消するために講習会を開いた指導センターの素早い対策はほめるべきだ」との発言があり、以後も京都府衛生部の公認でエイズ講習会を継続して行なうことになった。

当店は組合主催の  
エイズ対策特別講習会にも  
参加するが、衛生・消毒は  
法規を厳守し、万全を期して  
おります。  
ご安心の上、ご来店下さい。  
店主

不安症候群 刈り取れ

京で9、16日講習会

受講者にお墨付き  
「衛生対策さらに努力」

理髪店主ら  
ノウハウ勉強

### ■その3 クリーニング大手(タカケン)の向日市進出<昭和55年12月>

昭和55年12月10日(水)の新聞に「クリーニングの大手が向日市に進出」「新工場を拠点、550店計画」「京の2千店が影響」の文字が大見出しで発表された。この発表に京都のクリーニング組合は、早速会議を招集し、大反対の声を上げて、指導センターの山岡景一郎分野調整員(当時)は対処方法について相談に乗ることになった。山岡調整員は、直ちにタカケン(株)の専務を呼び、「中小企業事業活動の機会の確保のための大企業者の事業活動の調整に関する法律」=分野調整法=に基づき、京都の組合の合意が無ければ進出はできない旨を伝えた。ところがタカケンは、中小企業庁の指導では「組合や分野調整員にそんな権限はない。保健所に早く営業許可を下ろしてもらえ。」と、組合との協議を断ってきた。組合と指導センターは、法律と京都の実情をよくよく説明し次のような合意に至った。「500店の設置を60%減の190店に、洗浄設備機械の10台のうち4台を2年間封印(あと2年間封印延長)、営業開始日も半年間遅らせる。価格も組合の納得する料金とする等」厚生省も「京都方式とも呼べる画期的な内容」と讃えてくれた。



### ■その4 大学生協会館(コープイン京都)建設事案

かねてより全国大学生生活協同組合は、京都に会館を建設することを悲願にしていた。が、京都旅館組合は、公営旅館が低廉な料金で宿泊させ、過当競争を激化させるので、反対を表明していた。しかし、生協側が旅館営業の申請をするに至ったことから、旅館組合と生協との調整が必要となり、山岡景一郎事業活動調整員が協議の主体を務めることになった。

生協側は、仲間の旅館を指導しているセンターの調整員が仲裁をするのは、不公平だと言っていたが「法律等を知悉している教授団と、旅館の経営者とは、自動車と自転車以上の力の差があり調整員が旅館側に少し寄った判断をしても、それが公平だ」と押し切った。

協議の会合は、昭和62年(1987)の8月3日を皮切りに8回開催し、難産ではあったが、双方歩み寄り10月26日に協定書を締結することができた。

最初は官庁、指導センター、旅館、大学生協等の出席者が多く、協議が混乱したので、4回目の協議の折、山岡景一郎調整員から「旅館、生協から各5名の全権大使を選び決定権を委ねること。また、協議に当たっては、時には相手に対して暴言があったとしても、言論戦にとどめ、協議を中断して席を立つてはいけない。あくまでも、協議成立を促進するため、もし、勝手に離席をするなら、相手方の言い分を通すことにする」この「離席は負け」方式は、以後多くの会合で利用されるようになった。

協定書の主たる内容は、①会館の名称は「大学生協京都館」とし、愛称(コープイン京都)は小さく付記する。②和室の数を、予定より大幅に削減する(8室以下)。③生協組合員のみ宿泊させる。④施設の利用状況につき指導センターの事業活動調整員が立ち会うことができる。⑤組合側は、生協側が適性を欠く利用があったと認められるときは、監督官庁に通報することができる。

この会合で当時青年部の幹部として活躍していた北原茂樹、小野善三両氏の二人の名前を挙げておきたい。

## ■その5 O-157テスト講習会

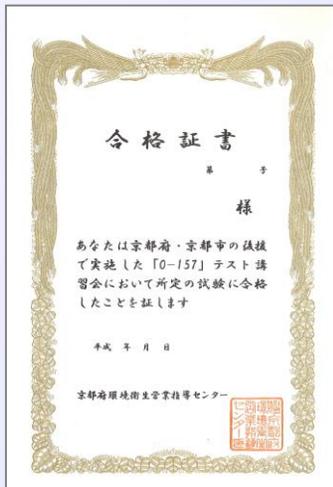
最近「ノロウイルス」が主な原因とする感染性胃腸炎が流行している。感染を防止するための対策については、各関係先の広報を参考に、入り口でシャットダウンしてもらいたい。

今から17年前の平成8年（1996）に、腸管出血性大腸菌（O-157オーイチゴナナ）の感染者が10,322人も発生し8人が死亡した。その後、平成14年（2002）に9人ももの死者が出るに至った。「O-157」とはO抗原として、157番目に発見されたもの。

当指導センターでは、早速、O-157感染予防対策に乗り出し、当時の環境衛生営業者を招集し、<「O-157」テスト講習会>を実施した。実施日は、平成9年（1997）7月30日（水）場所はルビノ京都堀川とした。受講料も組合員1000円、非組合員2000円とし、参加定員は250名としたが、応募者多数ですぐ満席になった。講師は、山岡景一郎講習会実行委員長をはじめ、京都府生活衛生課の北島啓次氏、京都市生活衛生課の森田正和氏、KBSの田淵岩夫氏が当たり、その後テストを実施した。

問題は、①もともと海に生息し、魚介類について来る食中毒菌は次のうちどれか？ A サルモネラ B 腸炎ビブリオ C ブドウ球菌 ② 腸管出血性大腸菌O-157に熱を加えたとき死ぬのはどれか？ A 55℃で1時間以上 B 65℃で10分以上 C 75℃で1分以上など、10問が出され、合格者を「O-157予防管理者」に認定し、合格証書と証票を渡し、不合格者には何度も追試を行った。

この講習会は、日本全国でも珍しく、いち早くO-157の感染予防対策に乗り出したとして、多くのマスコミに取り上げられ、指導センターの名が高められたことは嬉しいことであった。





# 環境衛生営業大フェア開催



**まつりの内容**

昭和五十六年の当指導センター発足以来毎年開催を続けている「京都かんえいまつり」は、第五回を迎えた昨年十一月十六日、十七日の両日京都市勤業館に於て総入場者延五万二千人と開設以来最大の賑やかさで盛大裡に行われた。その一瞥を紹介すると、当日は、開場待ちかねた来場者が長蛇の列をつくり、オーケストラと同時に雪崩の如く大挙入場。何時もながらの「かんえいまつり」の魅力をみせつけた。

特に、ランチタイムともなると用意された三〇〇席はすぐに満席となり、食卓席は順番待ちの人々は勿論のこと、中には座を待ちきれず立ち飲みスタイルで舌鼓を打つ光景も、そこそこに見られた。また、お買得市では、どつどりと買物品をバックに詰り

## 第五回京都かんえいまつりを盛大裡に開催!!

込む女性の姿が多く、一方、世界のコーヒー展では、展示された沢山のコーヒー銘柄見本を丹念に見ながら、係にわしい説明を求める熱心な人もあり、まつり気分は、最高潮で、消費者、利用者との結びつきが回を重ねる毎に濃くなっていく事を物語っていた。

今回の「京都かんえいまつり」は、第五回目の開催であり、共に、当指導センター設立五周年と重なる節目として初の補助金助成も受け、例年の二倍を占める会場面積で、次のとおり多彩、強力な体制で取組まれた。

- メインテーマの制定  
身近な暮らしのお手伝い  
食と生活サービス業
- 十六団体の提案  
京の味と三飲食コーナー  
かんえいお買得市コーナー
- 過去最大の出席状況  
海通コマ和と、大型特別コマ3による大規模 店舗構成



メイン会場入口

であると共に、各出展店舗は関連各団体組合の直営、協賛協力店としての積極参加。

- 世界のコーヒー展  
世界のコーヒーマップと、コーヒー産出国の主要銘柄見本展示による総てのコーヒー紹介。
- サービス券の発行  
一〇〇の買上げ毎に五十円相当の全店共通サービス券を連発し、会場内におけるサービス券による資金循環と販売促進に貢献。
- 大量の景品提供  
関係各社等の絶大な協賛により従来の二倍に当たる六千名の来場者に景品を無料提供。
- アンケート調査・業界P.Rの実施  
公衆浴場の「ふろの日」アンケート調査実施をはじめ





